

鑿行列（どぎょうれつ）祭

鑿行列（太鼓の行列）は、毎年松江で、松江の秋祭りの一環として、10月の第3日曜日に開催されます。（出雲地方では、日本のほとんどの地域で太鼓として知られている獣皮を張った木製の打楽器は鑿と呼ばれています）この祭りでは、松江の30の地区が、横向きに2つ大太鼓を設置した屋根付きの大きな山車を出し物にして競い合います。子どもたちが山車を引き、大人が太鼓を叩きます。各チームには、山車をひく人と太鼓を叩く人に加えて、掛け声をあげる人と、チャンガラと呼ばれるシンバルと横笛の奏者が含まれます。各地区から数百人もの人が集まり、色鮮やかな伝統装束を身にまとい競い合います。

太鼓を叩き酒を飲む

この祭りは、17世紀に秋の満月の夜に太鼓や笛や打楽器の演奏に乗せて神輿をひいた祭りに起源を持ちます。18世紀には二階建ての神輿が登場し、一階で子供たちが太鼓を叩くようになりました。当時の太鼓は直径50センチほどの小さなものでした。明治時代（1867-1912）に入ると、神輿は山車となり、直径1メートル以上のものになりました。この祭りは、人々が酒を飲みすぎたため、間をおいて何度か禁止されましたが、やがて計画と管理が行き届くようになり、祭りが存続できるようになりました。

世代を超えた伝統の継承

1915年の大正天皇の御即位の祝いは、鑿行列にとって良い刺激となりました。特に、車輪付きの山車の設計はより大きくなり、精巧さを増しました。当時のほとんどの地区の太鼓は直径120から150センチメートルでしたが、2団体はほぼ2メートルの太鼓を持っていました。それぞれの地区の山車にはそれぞれ特有の設計と太鼓の演奏法があり、本番前の数週間には、夜になると松江市中で太鼓のリハーサルの音が聞こえます。鑿行列は、それぞれの世代が地区の様々な伝統や祭りでの役割を伝承する機会になっています。山車、提灯、楽器、およびその他の祭り用の道具は、祭りの季節以外は特別な保管用の小屋で保管されます。

寺町地区の鑿行列伝承館では、山車や太鼓のほか、この賑やかな祭りの伝統と歴史を伝える映像を一年中見ることができます。